

岸川雅範 提出 学位申請論文（課程博士）

『江戸天下祭の歴史的展開に関する研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

「江戸天下祭」とは、江戸総鎮守と讃えられた神田明神（現神田神社）の神田祭と、山王権現（現日枝神社）の山王祭をめぐる両祭礼を指し、幕府公認の年中行事に関する名称である。その「江戸天下祭」に含まれる神田祭を対象として、近世江戸期から近現代まで、歴史的な性格や展開を明らかにすることを目的としている。

序章「江戸天下祭に関する研究史」では、神田明神の神田祭と日枝神社の山王祭との祭礼は、幕府公式の年中行事の一つであり、殊に神田明神は幕府と関係が深かった。天下祭の研究では江戸学の祖・三田村鳶魚を始めとして、岡本綺堂、

藤沢衛彦などが続いた。戦後は東京市役所編『天下祭』が刊行され、今もお基礎文献とされている。幕府公式の年中行事として意義や主要素に関する研究がなされ、さらに千代田区教育委員会が昭和五十五年から調査を始め、山車が注目されてきた。最近の研究動向では行列の諸要素を取り上げられ、とりわけ氏子各町から出された附祭、御雇祭にむけて進展がみられる。

第一章「江戸の神社祭礼」では、江戸時代の主要な神社祭礼について考察している。神輿が賑やかに担がれる現在の祭礼風俗とは異なり、山車と附祭が多く出され、渡祭礼が行われていた事例を明らかにした。さらに火事や洪水という自然災害と祭礼の関係、社殿の大破と修造、神輿や道具の破損と修理、将軍の凶事、氏子関係による延期・休止・縮小などを余技なくされることが、予想外に多かったことを明らかにしている。それらの中でも天下祭である神田祭と山王祭だけは、幕府公式の年中行事として行われてきたことを指摘した。

第二章「江戸天下祭の主要素と歴史的展開」では、天下祭と称された神田祭の

構成要素と執行状況、変遷過程について明らかにした。まず祭典行列は、江戸城の内郭に入ることが通例であり、城内で徳川将軍の上覧を賜わり、御台所や世子らが見物した。さらに幕府が神輿行列の費用を分担したこと、国役として神輿昇などの所役を伝馬町が請負ったこと、幕府費用で町々に御雇祭を出すよう勧めたことが、その特徴として挙げられる。神田を中心に山車・附祭を出したが、従来は研究されなかった側面である。また祭礼日程について、六月に町内で取締掛を選任し、十月過ぎに入用高を提出するまで半年を費やした。諸準備を重ねて幕府・神社・氏子が綿密な準備を重ねたことが知られる。最後に史的変遷を辿って、賑やかな元禄・化政期にひきかえ、質素・儉約の規制が加わった享保・寛政・天保期など、時代変化を念頭に考察した。

第三章「神輿」では、天下祭の中心をなす神輿行列について、幕府が神輿が元和三年（一六一七）に新調して、修理と新造を重ねるなど、経費を負担することが大前提であるが、財政状況によっては町々や大奥が負担したこともあった。ま

た国役として大伝馬町・南伝馬町が神輿舁をつとめ、江戸や諸国神職が奉仕し、大名諸侯が神馬・長柄などを差出すなどが、神輿行列の重要な要素であった。さらに「揉合型神輿舁」、所謂「揉み舁ぎ」が、都内各所で行われている現代の神輿舁ぎに深い影響を与えた。半纏についても、両伝馬町の獅子頭持ちを奉仕した鳶人足の半纏がその原型である。そして天下祭をはじめ神社の祭礼において、白丁姿で粛々と神輿が担がれるに至ったという。

第四章「山車、附祭」では、氏子町における山車が従来様々に研究されてきたが、附祭については研究自体が少なく、その歴史的な展開を辿ったものも見当らない。神田祭に出された山車は、三十六番組に分けられる氏子町々によって、四十本前後が出されてきた。一町で山車が一本、あるいは数町連合で一本、或いは一番内に三町あれば三本を出した。総じて山車の番組と町々については、幕府の厳しい規制があり、江戸期を通じて変更されることは無かった。山車を飾る人形について、神話・昔話・能などに題材を採るものが多く、当初には小ぶりの形式

であったが、やがて人形や飾りが大型化して、車輪がつけられ、牛や人が牽く形式へと変化し、幕末期には「江戸型山車」という豪華な山車が出現するに至った。また附祭とは氏子町々より出したもので、江戸における神社祭礼において、もつとも盛り上がった行列と云えよう。前段階の行列を「練物」と称して、上段に人形をのせ、下段に囃子方が居ならぶ四輪車で、牛が牽く大型屋台である。仮装行列や造物が続くこともあったが、享保の改革によって大型屋台が禁止され、人数を制限した山車のみが行列となったことを考察した。

第五章「御雇祭」とは附祭に似た行列で、太神楽や独楽廻しなどの諸芸が加わるものを指す。幕府は天下祭でも神田祭のみに御雇祭を命じて、経費の一部を負担した。御台所や将軍の世子が見物することが多く、大奥より特に希望したため「御好附祭」「御好品」とも呼ばれた。その一方で、御雇祭を出した世話番町では庶民芸能の場として、女子を中心とする子供たちが行列に多く加わり、幕府より下された経費以上に、賑やかな行列を繰り出したことを考察した。

終章「天下祭　その後」では、江戸期の天下祭と東京奠都後の神田祭とを比較しつつ、その歴史的展開を明らかにした。神田明神は明治以降に神田神社と改称し、江戸総鎮守から皇城守護の准勅祭社、さらに東京の氏神である府社へと神社の役割を変化させた。それと共に幕府の公式行事から奠都後の皇室と新政府、さらに府民から都民へと氏子守護を目的とする祭礼をめぐる、その意味と目的とを大きく転換してきた。また江戸城内の巡行と將軍の上覧を目的とする祭礼から、氏子区域を渡御する祭礼への変化を指摘している。世襲神職の廃止と祠官・祠掌の任命、氏子区域の確定があり、町内から出す山車は明治以降、年次によって大きく振幅している。町内や順番も一定しないが、幕府の規制から解除された諸社祭礼のように、むしろ経済状況に見合っつて山車や附祭が出されている。明治二十五年に祭月が変更して、山車や踊台が無くなり神輿渡御となった。しかも氏子区域が次第に拡大して、大正期になると週日を必要とする祭礼へと肥大していった。江戸期から明治・大正と時代が下ると、神田祭は天下祭から氏神祭礼、あるいは

都市祭礼へと発展していった。さらに戦後の影響を受けて大都會の祭礼と化して、現代の多彩な在り方へ引き継がれたと結論づけられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は「江戸天下祭」について、神田明神の神田祭を取り上げ、その歴史にみる変容や要因をめぐり、江戸期を中心として近現代におよぶ視座から、その歴史的な展開のあとを考察した論考である。まず江戸の神社祭礼について、江戸期における神社祭礼の全般を見渡して、幕府と祭礼との関係をはじめ災害や事故の影響、氏子の信仰ならびに経済状況、社殿・神輿の大破と修復について述べている。神社関係の祭礼史料を各方面に博搜してよく吟味されており、浅草三社権現・赤坂氷川明神など、限界のない大江戸研究の一環を担う重要性をもつ分野の成果として、江戸の祭礼研究に寄与することが多い。

天下祭の主要素と歴史的展開について、天下祭の基礎的知識を述べ、その要素・祭礼日程・執行状況を論述しており、特に将軍上覧で賑わった元禄期の論述は精彩を放っている。神田祭年表は全体として編年的な叙述が極めて実証的であるが、今後とも事項について補訂されるべきことが必要であろう。しかも祭礼日程が不完全である印象は否めず、特に御雇祭の日程をさらに検討して、なおも神田祭年表の記載事項を埋める努力が望まれる。神輿では、天下祭の中心をなす神輿行列を検討して、幕府の国役として専ら四伝馬町（大・南・赤坂・四谷）が奉仕してきたことを明らかにした。そして従来ほとんど研究されていない祭礼行列を取り上げて検討し、「神田明神祭礼絵巻」にみる神輿行列について祭礼道具を詳細に論述するなど、行き届いた考察を加えている。近世から近代にかけて山車から神輿へと、祭礼の中心的な役割が変化していった事情は明快であり、十分な説得力に富んでいる。

次いで山車と附祭では、幕府が祭礼費用を負担して、国役として伝馬町が神輿

担ぎを請けおい、神田町を中心とする氏子中が山車・附祭・御雇祭を執行したことを論じている。特に山車に関連して祭礼番付（文化四年）や明神祭礼一件（弘化四年）によって、番組・町名・題目・内容にわたり比較対照する一覧表は、興味あふれる試みであった。附祭や御雇祭を併せて一覽したことは成果に数えるべきで、今後の分析研究の上に示唆する所が多いと思われる。同時に山車に乗った囃子の音曲など、なおも詳しい研究を行なえば良かったと考えられる。それらの中で神楽・囃子・清元・常磐津などの舞踊や音曲、人形師、家持・若者・鳶・職人などの面々、さらに天下祭を含む江戸の神社祭礼など、なお未開拓の研究分野が多く残されている。芸能と音楽などの視野から分析の工夫がなされれば、更なる成果が期待できたと思われ、もう少し芸能史・音楽史の成果を取入れることを要望したい。しかし全体として先行研究も少なく、本論文が先駆的な業績を齎したものと評することができる。

また御雇祭に出された太神楽や独楽回しについて、演目の具体的な内容や世話

番町の動向、行列に加わった女子・子供など、今までの研究を凌駕した考察を加えている。特に神田祭にかぎり行われた品返御雇祭に触れているが、なおも詳細な成果報告を今後に期待したい。尤も「渡り祭礼」の学術用語化には、なお慎重を要すると考えられる。天下祭の研究において、江戸から東京の神社祭礼へと考察した数少ない論考の一つに数えられ、注目すべき成果と云うことができよう。

しかも神田祭が幕府公認の祭礼でありつつ、近代から現代において皇室・国家、さらに氏子の祭礼へと発展的に理解している。江戸から東京への転換期において、明らかに目的と意味とが転換されたことを見届け、大きく機能してきたと認められる。ただ明治以降に盛んになった神輿について、その巡幸路図を完備することが必要であろう。

天下祭の主要素が際立って明確であり、近代の東京における数少ない神社祭礼に向けての論考として、今後の研究に大きな指針を与えたものと言うことができ。大正期について山車・神輿数などの推移を述べているが、やや平板な印象を

免れず、資料的な制約もあり、各時代の考察が概論に止まっていることが惜しまれる。しかも執筆範囲を超えることながら、昭和前期から現代へと比較の幅を広げて、史的展開を見定めてゆくことが切望される。同時にそれぞれの個別的な研究をとり進めて、今後とも万全を期するため、研究成果を積み上げてゆくことが肝要であろう。さらに神田神社と共に、城内鎮守として知られる日枝神社の山王祭について、今少し適切な配慮があつて当然ではなからうか。祭礼史料は明らかに神田祭以上に豊富であり、その史料を駆使した天下祭という観点から章立てが必要であり、江戸祭礼の歴史的研究に資する意味からも、山王祭を含めた全体的な配慮を加えることが望ましい。

およそ祭礼とは伝統と変化のバロメーターになるもので、伝統性ゆたかに時代を超えて生き続けるため、近代から現代への時代変化を詳細に辿りつつ、伝統と変化をめぐる様相を見届けることが必要であろう。天下祭の実証的かつ包括的な研究として、明らかに今後の個別研究において、研究を位置づけるべき指針にな

り得るものと信じている。さらに個々のオリジナリティを編年的に仕上げた手法の信頼感、抜きん出た成果を全体的に纏め上げ、論点の明確さに加えて、全体として過不足ない出来栄であり、神田祭を把握しようとする熱意の所産と讃えざるを得ない。現代にいたる神社および祭礼において、多様な信仰形態を探求する研究が、今後とも大いに進展することを強く期待したいものである。

よって本論文の提出者岸川雅範は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十五年二月十五日

主査 國學院大學教授 中西正幸 ①

副査 國學院大學教授 阪本是丸 ①

副査 武蔵大學教授 福原敏男 ①
國學院大學大学院兼任講師